様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 １２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２５５３

研究課題名（和文）ガンダーラ浮彫画像帯の考古学的検討にもとづく仏教文化の研究

研究課題名（英文）Studies on Buddhist Culture Based on Archaeological Analyses on Gandharan Narrative Reliefs

研究代表者
内記　理（Naiki, Satoshi）

京都大学・文学研究科・助教

研究者番号：９０７２６２３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ガンダーラ（パキスタンのハイバル・パフトゥンフワ州）の仏教寺院址出土のガンダーラ彫刻のうち、浮彫画像帯の分析をおこなった。浮彫画像帯にはブッダの生涯を描いた仏伝物語などが彫刻されるが、それらが各時代においてどのような様相をもっていたかはこれまでに整理されてこなかった。仏教寺院址から発掘調査で出土した彫刻を取り上げ、分析をおこなった結果、各時代の様相を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究の結果、各時代において、ガンダーラで作られた浮彫画像帯がどのような様相を持っていたかが整理され、仏教美術の流れの一端が明らかになった。ガンダーラにおいては、ブッダの姿を積極的には描かない浮彫画像帯を用いていた時期と、ブッダが説法し、崇拝される姿を積極的に描く浮彫画像帯を用いていた時期の、２つの時期があったらしい。日本を含めた東アジアの仏伝図像を理解する上でも重要な研究成果である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to understand the role of narrative reliefs, on which Buddhist stories such as ones from the life of Gautama Buddha were depicted, found in the Gandhara region in the north-western Indian subcontinent. By analyzing materials unearthed in excavations at ruins of Buddhist monastic temples in the Gandhara region, a part of Buddhist cultures there from the 1st century CE to the 3rd century CE was revealed.

研究分野：考古学

キーワード：ガンダーラ　浮彫画像帯　仏教　仏塔　考古学　東西文化交渉史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

西北インドで見つかるガンダーラ彫刻のうち、仏塔の胴部などを装飾した浮彫画像帯については、A. フーシェ氏以来の研究がある（Foucher, A. 1905 *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra: Étude sur les origines de l'influence classique dans l'art bouddhique de l'Inde et de l'Extrême-Orient*, I, Paris.）。フーシェ氏は仏教経典の記載に基づいて、画像帯に描かれた場面の同定をおこなう研究をおこなった。その後の研究者によって、さらに様々な場面の同定作業が進められ、現在では多くの浮彫画像帯について、そこに描かれた場面の特定が進んできた。

しかし、浮彫画像帯は本来、個別にではなく、複数点がセットとして用いられたものである。複数枚の浮彫画像帯が、仏塔の周りに貼り付けられていた。よって、セット関係に基づいて浮彫画像帯を見なければ、それを作った意図を読み取ることができず、個別の浮彫画像帯の役割さえも明確にならない。セット関係を元に画像帯を見ようとする研究は、D. ファッチェンナ氏による研究でようやく現れ、近年ではK. ベーレント氏などもおこなっている（Faccenna, D. et al. 2003 At the Origin of Gandharan Art. The Contribution of the IsIAO Italian Archaeological Mission in the Swat Valley, Pakistan, *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia*, 9-3.；Behrendt, K. 2005 Narrative Sequences in the Buddhist Reliefs from Gandhara, in Jarrige, C & V. Lefevre (eds.) *South Asian Archaology 2001*.）。日本では宮治昭氏やそれを引き継ぐ上枝いづみ氏の研究がある（宮治昭 1994 年「インドの仏伝美術の三類型」『佛教藝術』217；上枝いづみ 2014 年「ガンダーラにおける仏伝図の研究」）。ところが、これらの研究で取り上げられた浮彫画像帯のセットは極めて少なく、それらを検討するだけでは、西北インドの仏教寺院において、個別の浮彫画像帯が全体の中でどのような役割を担ったかが見えてこない。

浮彫画像帯から西北インドの仏教文化についての検討を進めるためにも、浮彫画像帯セットの事例を増やす必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、浮彫画像帯の分析を通じて、西北インドにおける仏教文化の一端を明らかにすることである。そのためには、可能な限り多くの浮彫画像帯セットの事例を探しだす必要がある。そして、それぞれがいつ頃に作られ、また、各浮彫画像帯が仏教寺院においてどのような役割を担ったかを検討することも必要である。浮彫画像帯には、ブッダの生涯を描いた仏伝物語などが描かれるが、それらがいつの時代にどのような文脈で使われていたかを確認すれば、当時の仏教の信仰の姿も見えてくるはずである。とくに今回は、遺跡の発掘調査で出土した資料を取り上げる。仏教文化についての議論を、より科学的なものにするためである。

３．研究の方法

本研究では、遺跡から出土した浮彫画像帯を取り上げる。とくに、日本の調査隊が過去に発掘調査した遺跡から出土した資料を活用することにより、これまでの研究で曖昧なままにされてきた、仏教寺院におけるそれぞれの浮彫画像帯の位置づけについても明らかにできると考えた。

仏教寺院遺跡の中でとくに、ラニガト、タレリ、メハサンダの３つの遺跡を取り上げる。これらの遺跡の中にある各塔院から出土した浮彫画像帯についての情報を整理し、浮彫画像帯のセット関係を導き出す。

セットを設定するに際しては、主に、１）浮彫画像帯の規模、２）画面の構成、３）画面内を仕切るための図像、の３点に着目する。また、確認できるものについては、上面や下面にあるほぞやほぞ穴といった、浮彫画像帯同士、ないし、他の部材との接合にかかわる技法的な側面にも着目する。同じ規模、構成、仕切り、技法を共有する各浮彫画像帯を、同じ仏塔の同じ列を飾ったものと見なし、それらをセットとして設定する。

そして、それぞれのセットに含まれる浮彫画像帯が遺跡のどの地点から出土したかを確認し、また、仏塔の規模との比較に基づいて、それぞれのセットがどの仏塔を飾っていたかについての検討もおこなう。

このように、セット関係を整理し、どこを飾ったものかを整理した上で、そのセット内にどのような仏伝場面が描かれているかを確認することにより、各浮彫画像帯セットおよび各浮彫画像帯の、寺院内における役割について考察する。

４．研究成果

本研究期間においておこなった研究の成果は、以下のようなものである。

（１）ガンダーラにおける浮彫画像帯の様相の解明

ガンダーラ地方においては、ラニガト、タレリ、メハサンダの３つの仏教寺院址から出土した浮彫画像帯の分析をおこない、各時代の仏教文化の様相を探った。

まず、ラニガト寺院址では、３つの塔院から出土した浮彫画像帯を整理した。研究上とくに重

要なのは、ラニガト寺院の創建時期のものと考えられる浮彫画像帯セットの存在を提示できたことである。それらの制作時期は、紀元後 1 世紀後半頃にまで遡りうる。従来不明であったガンダーラ地方における 1 世紀後半頃の仏教文化の様相の理解に迫るものである。その成果はすでに共著書籍のために入稿し、校正までを終えている。また、スワート地方のブトカラ I 寺院址から出土した浮彫画像帯との比較検討を通じて、仏像の出現時期に迫る検討もおこなった。すでにこの研究についても口頭発表を終え、共著書籍出版に向けて入稿の準備に入っている。

タレリ寺院址においては、C 地区にある 2 つの塔院から出土した浮彫画像帯を整理した。C100 区と C106 区から出土した浮彫画像帯セットの間には、図像上における明らかな相違が認められる。C106 区においては、浮彫画像帯の中にブッダの姿が多くは認められないのに対し、C100 区においては、ブッダの姿が積極的に描かれる。この違いが何を示すのかを考えるために、各塔院における彫刻の材質の比率に着目した。すると、C106 区のブッダの姿が多くは認められない浮彫画像帯セットが相対的に古く、C100 区のブッダが積極的に描かれる浮彫画像帯セットが相対的に新しいことを指摘することができる。これらタレリ寺院址 C 区塔院から出土した浮彫画像帯の分析結果は、2018 年にナポリで開催された国際学会「南アジア考古学・美術史学会」（European Association for South Asian Archaeology and Art）において口頭発表し、原稿を投稿した。原稿はすでに受理され、校正までを終えている。

メハサンダ寺院址においては、主塔院で出土した浮彫画像帯を整理した。3 世紀前半頃における浮彫画像帯の様相を確認することができた。その成果は 2020 年夏にバルセロナで開催される予定であった国際学会「南アジア考古学・美術史学会」(European Association for South Asian Archaeology and Art)において口頭発表する予定であったが、コロナの蔓延により延期が続き、現段階で 2022 年夏に開催される予定である。

これら 3 つの仏教寺院址の浮彫画像帯を整理したことにより、1 世紀から 3 世紀に至る時期の仏教文化の様相の一端を明らかにすることができた。

（２）ガンダーラ彫刻の材質の比率に基づいた塔院の造営順の解明

上記のタレリ寺院址における複数の塔院の造営順を整理するために、彫刻の材質の比率についての細かな検討をおこなった。土器や遺構の分析から各塔院の造営順が判明しているラニガト寺院址の彫刻を取り上げ、その材質の比率を整理した。すると、塔院の造営時期が古いほど、ストゥッコに対する片岩の割合が高くなることが確認された。その原則に従うならば、タレリ寺院址においても、片岩の割合が高い C106 区は、ストゥッコの割合が高い C100 区よりも古い時期に造営されたことになる。本研究成果については、日本オリエント学会第 62 回大会において口頭発表をおこなった後、共著書籍において執筆した。また、研究成果の一部については、ハーバード大学における講演会において英語で発表した。

（３）カローシュティー文字の形態に基づいた研究の有効性の確認（予察）

ガンダーラ彫刻を初めとする西北インドの物質資料の制作時期を整理する上で、それらの資料に刻まれた文字の形態が大きな手掛かりになるのではないかと考え、予察的な分析をおこなった。その結果、字形の有無ではなく割合に着目する独自の視点が有効であることを確認した。現段階での見解については、日本オリエント学会第 61 回大会において口頭発表をおこなった後、『西南アジア研究』に論文として投稿し、すでに掲載された。字形に基づいた本格的な研究を、今後実施する予定である。

（４）玄奘が記録したタキシラの仏塔と都城の位置の検討（予察）

本研究課題遂行の過程で、2019 年にパキスタン渡航に成功した。渡航時にタキシラ地方にある複数の仏教寺院址を訪問し、その主要な仏塔の規模の確認をして回った。その踏査を踏まえ、玄奘が記録した仏塔について再検討をおこなったところ、従来の通説とは大きく異なる仮説を立てるに至った。この仮説については、日本オリエント学会第 63 回大会において口頭発表をおこなった後、『オリエント』に投稿し、すでに掲載された。今後、現地調査を含めた実証的な検討が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Satoshi NAIKI	４．巻 2016
２．論文標題 Gandharan Sculptures with Inscriptions Including Years	５．発行年 2020年
３．雑誌名 South Asian Archaeology and Art 2016	６．最初と最後の頁 165-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内記理	４．巻 90
２．論文標題 年代判定の一指標としてのカローシュティー文字の形態	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西南アジア研究	６．最初と最後の頁 20-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内記理	４．巻 2019年度
２．論文標題 中国唐宋期の石製棺形容器についてー羽田邸に伝来した新例の分析からー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都大学構内遺跡調査研究年報	６．最初と最後の頁 157-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Satoshi Naiki	４．巻 2014
２．論文標題 The Chronological Benchmarks for Gandharan Sculptures	５．発行年 2020年
３．雑誌名 South Asian Archaeology and Art 2014	６．最初と最後の頁 259-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Satoshi Naiki	4．巻 1
2．論文標題 Geographical differences and similarities in Gandharan sculptures	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Geography of Gandharan Art: Proceedings of the Second International Workshop of the Gandhara Connections Project, University of Oxford, 22nd-23rd March, 2018	6．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内記理	4．巻 719
2．論文標題 考古学からみたガンダーラ彫刻の成立と展開	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史と地理　世界史の研究	6．最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内記理	4．巻 64(2)
2．論文標題 玄奘が見たタキシラの都城と仏塔	5．発行年 2022年
3．雑誌名 オリエント	6．最初と最後の頁 217-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　6件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 内記理
2．発表標題 ガンダーラ地方の仏教寺院における塔院と彫刻材質比率の関係
3．学会等名 日本オリエント学会第62 回大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 Satoshi Naiki
２．発表標題 Kushan iconography on sculptures found in Pakistan and Afghanistan.
３．学会等名 Second Annual Shahi Project Meeting.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 内記理
２．発表標題 カローシュティー文字の形態変化に関わる考古学的検討―西北インド出土の碑銘資料を中心に―
３．学会等名 日本オリエント学会第61回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satoshi Naiki
２．発表標題 The Analysis of Narrative Panels from Thareli in the Gandhara Region.
３．学会等名 The 24th Conference of the European Association for South Asian Archaeology and Art, Naples（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Satoshi Naiki
２．発表標題 Narrative Sets of Buddhist Reliefs Found at Thareli in the Gandhara Region
３．学会等名 Guest Lecture at Cluster of Excellence Asia and Europe in a Global Context, University of Heidelberg（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 内記理
２．発表標題 仏像の出現時期について
３．学会等名 「「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究」研究班（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Satoshi Naiki
２．発表標題 Buddhist Monastic Site of Thareli in the Gandhara Region and its Sculptures
３．学会等名 CAMLab Online Seminar by "Digital Gandhara" project, Harvard University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 内記理
２．発表標題 3世紀頃の西域－『魏略』西戎伝に記された世界－
３．学会等名 「3世紀東アジアの研究班」研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 内記理
２．発表標題 『大唐西域記』記載のタクシャシラの仏塔についての再検討
３．学会等名 日本オリエント学会第63回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 内記理
２．発表標題 旧羽田邸に伝来した 中国唐宋期の棺形容器について
３．学会等名 第85回羽田記念館定例講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 内記理・他省略（総32名）	４．発行年 2021年
２．出版社 真陽社	５．総ページ数 280
３．書名 昼飯の丘に集うー中井正幸さんの還暦記念論集ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関